

# 大谷學報 第十四卷 第一號

## 法華經に於ける『妙音』の語義について

泉 芳 璟

一

今は昔、明治四十四五年の頃、その時は未だ南條ケルンの出版本が世に出ない前、予は南條先生から回附された稿本の梵文法華經を前にして、遅々たる翻譯の筆を運ばせてゐたが、偶まその第二十三妙音品の妙音の原語に行き當り一寸如何に譯すべきかに躊躇した。原語 Gadgada-svara の前分 Gadgada は、現今の辭典の總てが一致して告げる所に隨へば、竺法護や羅什の譯してゐるやうな『妙』といふ意義でなく、否寧ろその反對の『訥』の意義である。當時、東奔西走の先生を煩はして譯語上の相談をするといふやうなことは到底不可能な状態であり、それに印刷の方から忙がされるのとで、予は取りあへず獨斷で『訥音』といふ譯語を當てゝ置いた。これは予の勝手にやつたことで南條先生の更に關り知られないことである。それに就ては序文にも言及してゐる通り、譯本二四八頁

以下は全然予の責任區域、それより以前は先生の執筆に成り、随つて予は一指をも觸れてゐない。前半は全然先生の責任、後半は予の責任といふわけである。それは二四八頁五行と六行を以て境する。

羅什や竺法護のやうな翻譯の巨擘が一致して『妙音』<sup>①</sup>と譯してゐるのに、自分が敢然と『訥音』と譯したに就ては、若干氣が咎めないでもなかつたが、ケルンの英譯はその脚註から推すと『訥音』の意義と認められるので、後日の研鑽を期して假にさうして置いた次第であつた。其の後岡教遂氏は『妙音』の譯語を用ひてゐる。最近、本田義英氏によりて龍谷大學論叢第三〇二號（昭和七年六月發行）に「妙音の語義と其の神話」と題して、詳細に論述考證せられたのを見た。一讀して面白いとは思つたが、その一部分にやゝ承服しかねるものもある。

予にとつてはこの一語は多年の懸案でもあり、幾分責任も感じてゐる次第なので、少しくこれに就て考へて見る。一體他人のことを批評するものゝ、自分の考察に就ては未だ満足してゐるわけでもない。どうか遠慮なく批評して頂きたい。それによつて覆はれた眞理が明かになるやうにといふ念願の他に何の意圖も無い。

## 二

予は全く白紙の境地に立つて、虚心に南條ケルン本の妙音品に對ふ。すると子の眼を射たのは脚

註である。gadgada の語に關して脚註は「各寫本總てが sangada に作る」とあるでは無いか。予はそこで取り敢へず手近の河口梵本の寫眞を覗いて見ると、この妙音品全章に互つて、予の計算に誤なくば、四十回この名が出てゐる。その中で十一回までは sangada とある。即ち ga 字の上にアヌヴァーラの點が判然と認められる。残りの二十九回は gadgada と讀むべきか、將た又 sangada と讀むべきか、甚だ躊躇せしめられる。一體古梵字の nga と dga は極めてまぎらはしく、前後の關係で讀むしか無いのだが、併し今の場合には十一回までも、即ち總數の四分の一強の割合に、 sangada と讀まれる以上、この寫本製作者の意志は先づ恐らく sangada と讀ませるつもりであつたとせねばなるまい。他の寫本は手元に無いから對校するに由なきも、出版本の脚註を信賴するとして先づ各寫本大體のところ sangada 又は sangada に一致するものと見るのが至當である。

梵文法華經の佛譯者ビュルヌフはこの原語を取り扱つた時に、何の見る所あつてこれを gadgada と讀んだのか。予は判斷に苦しむのである。ケルンの英譯はこの先輩の所爲に追隨したものであらうが、何故この時寫本の再吟味をしなかつたのか。延いて出版に際してはどうして各寫本的一致する sangada なる讀み方を棄却して、何の根據を以て gadgada なる讀み方を採用したのか。全く判斷に苦しむのである。若し夫れ予を以てこの寫本を取り扱はしめば、たとへビュルヌフの先縦は如何にもあれ、斷じて gadgada なる讀み方には左袒せず、寫本其の儘の sangada と云ふ讀み方を

採用したであらう。これ寫本に忠實なる態度と謂ふべきであると確信する。

此に根本に於て見直してかゝるとすれば、現在の出版本こそ訂正さるべきでないか。これが俑を作れるものは遠く學匠ビュルヌフに在り、次にケルンの英譯に、次に出版本等々。gadgada に餘程特別な意義があり、どうしてもこれを以て寫本の語を訂正せねばならぬといふのならば兎に角、要するに gadgada なる語の關係する限りでは、本田氏の考證の如く、『訥音』で行き詰るより致方がないのであるから、若し夫れ『訥音』を採用したくないならば根本に立ち歸つて gamgada 即ち gan-gada を採用するのが當然でないか。

### 三

實際に竺法護の『妙吼』、『妙音』、羅什の『妙音』に對して『訥音』では如何にも氣が咎めてならない何とかしてこれを『妙音』と讀みたい衝動は、予にしても、又誰にしても有る。支那の翻譯、註釋は現今のところ『妙音』に一致してゐる。其の他の譯語は知られてゐない。

然らば西藏譯は如何。これは本田氏も觸れてゐるやうに、<sup>མཁའ་མཁའ་མཁའ་</sup> <sup>མཁའ་མཁའ་མཁའ་</sup> に一致してゐる。併しながら予を以て見ればこの藏語はこの儘では意味をなさぬ。本田氏はこの <sup>མཁའ་</sup> <sup>མཁའ་</sup> と讀み更へて『清淨なる音』と見てゐる。これはその註に明記してゐられるやうに、山口、櫻部、鷹野、眞田諸氏のやうな堪能な西藏語學者の考慮を煩はした結果であらうと察する。併し予にはこの讀み改

め方が何となくしつくりと感ぜられない。予は藏語の智識に於て固より自信を有しないものであるから、「然うだ」と言はるれば「然うかなあ」と承認するより他にせん術もないのであるが、此の場合『清淨なる音』など、云はれると、何だか「屋上屋を架する」と云はうか、又もや厄介なものがそこに持ち出されたといふだけの感じで、少しもこちらの方の困つてゐて知りたいと思ふ點に觸れて呉れない。梵語の解讀に藏語が幫助を與へて呉れるのは實に多大なもので、又その快刀亂麻を斷つやうな明解は、今此に『清淨なる音』といふやうなことを知らせて貰ふ位の手ぬるいもので無いのは平常のことである。それだけに一種の物足りなさを味ふのである。殊に ハフ を ハフカ に讀み改めるなにかが、第一に腑に落ちない。同じ讀み改めるならもつと他に方法は無いものか。

予はこの 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 に對して、若しこれを讀み改めることを許されとしたならば、𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 と讀み改めてはどうかと考へてゐる。𠂔 と 𠂔 とは草書體に於て極めて類似する。即ちチエツクの添加された 𠂔 字の草書體は時として 𠂔 と見誤られる。又 𠂔 と 𠂔 とは正體と云はず草體と云はずこれ亦よく寫誤されること常の如くである。そこで以て 𠂔 𠂔 𠂔 を假りに 𠂔 𠂔 𠂔 と寫誤したりとせんに、その場合、幾分文法的の智識が働くと却つて第二の 𠂔 の次に 𠂔 字を填めることはやり兼ねないのである。そこで 𠂔 𠂔 𠂔 と云ふやうな尤もらしい、而も無意義な語が出来上つたのではないか。故にこれを還元するには、先づ誤つて挿入された 𠂔 を省き去り、次に正しい

形に直して  $\text{𑖀𑖄𑖳𑖫}$  とするのが正しい修正ではないかと思ふ。かくすれば梵文寫本の一致して提供せる *saigada-svara* と符合するわけである。但しこの場合、西藏譯者が何時もやる常套手段、即ち、何ものでも譯してしまふ主義を取らず、原語の儘で梵語が残されてある爲めに、西藏譯者の考へてゐる意義を知ることができぬのは遺憾である。尙ほ寺本教授には  $\text{𑖀𑖄𑖳𑖫}$  の寫誤では無いかとの疑、これに對する寫誤の徑路等に説もあるやうだが、これはあまりに『妙音』なる觀念を待ち設け過ぎる嫌が無いでもないから、予には今のところ隨ふ意志が無い。

## 四

以上の觀察から『妙音』に相當する梵語は *saigada-svara* であることが最も至當と認められた。さて然らば *saigada-svara* とは何を意味するか。先づ *svara* の『音』なることは異論無しとして *saigada* とは抑も何であるか。 *saiga* は *saiga* であつて、殞伽即ち恒河のこと。これが合成語の前分となる時、長母音を短縮することは常の如くである。又 *da* は *da* 即ち「與ふ」、「施す」の意義ある動詞の語根が、合成語の後分となつて其長母音を短縮すること、是れ亦常に見る所、例せば *anna-da*, *artha-da* といふやうな語があり、又佛教語では施無畏 *abhaya-da* といふのがある。時としては *abhayaṇ-dada* にも作る。而して意義は「殞伽を與ふる」、「殞伽を生ずる」といふやうなもので、殞伽河は印度著名の大河であり、河の梵語 *nadi* といふからが既に *nad* 「響く」といふ語根か

ら造語せられるやうに、河水の蓊々たる、或は澎湃たる、共に人の耳に快適、美妙ならざるは無ければ、「菟伽を與ふる」なる語に『妙』といふ譯語を配當しても強ち不合理とは云へぬ。併しながら固より是れ義譯にして、正確なる敵對正翻とは謂ひ難い。恰もかの sarasvati を『妙音』と譯するやうなものである。sarasvati は saras 即ち湖(又は池)を所有する女神で、印度神話では雄辯、智慧の神と見られ、辯才天女と譯することは即ち當を得たるも、『妙音』の譯に至つては義譯であると謂ふ他は無い。西藏譯が སྐྱེལ་པོ་ལྷ་མོ་ と直譯せるは當に然るべきである。支那譯家は何等かの根據によりて字に依らずして譯を造ることは常のことなれば、これを穿鑿して臆説を設けることは好ましく無い。今「菟伽河を與ふる音」も亦然りで、何等かの理由で支那譯家はこれを『妙音』と譯したのであらう。

## 五

一體、佛教經典に現はれる佛名菩薩名なるものは、阿閼とか、阿彌陀とか、文殊、普賢など云ふ、特に著名なるものは兔に角として、經典編集者が隨時に創作したと想はるゝものが相當に多い。試みにかの佛名經などを開いて見ると、何しろ三十卷もある大部の經典が、佛名ばかりで埋めてあるといふ次第で、全く常識を超越してゐると謂ふの外は無い。十方千五百佛名經、五千五百佛名神咒除障滅罪經、現在賢劫千佛名經、過去莊嚴經千佛名經、未來星宿劫千佛名經、恁んな風に名を聞いた

だけでも聊か驚かされる。これらの經典に充滿してゐる佛名を搜索したら、何か *śaṃśadā-svara* 施伽施音といふやうな名にも邂逅するやうな氣もする。併しそうした所で別に大した益もないから、それは止めるが、施伽河は印度としては著名であるから、施伽を縁とした名は屢々見るのである。*śaṃśa-datta*, *śaṃśa-dāsa*, *śaṃśa-dhara*, *śaṃśeśa* 等其他にも尙多い。但し *śaṃśa-da* といふ語が未だ用例を見ないのは却て奇妙に思はれる位のことである。稍穿鑿に過ぎる嫌を免れぬかと思ふが、*śaṃśodbheda* といふ語があつて、これは「施伽河の本源」といふ程の意味であり、巡禮の聖地のこととしてマハーバーラタ(二、八〇四三)にも、ハリヴンシャ(九五二四)にも用例があると辭典に見えてゐるのは、何となくこの *śaṃśa-da* (施伽施者)に因縁あるものゝ如く感じられる。恒河とヤマナ河の合流する地方は巡禮の聖地であり、予も一回汽車の窓から遙かに望みつゝ通過したが、河水は白い波を立てゝ奔湍激流の狀を呈し、淙々と音高く流れてゐる。施伽を施す者、施伽を生ずる者といふことは施伽の本源といふ意味と取つても敢て太しい過もあるまいかと思ふ。併しこれは鑿説と云はるればそれまで、斷定は勿論差し控へる。只『妙音』といふ譯に何とかして近づけようとすれば、恁んな風にでも考へて行くより他に方法はあるまい。併し羅什や法護が勝手に譯した意圖を忖度してあれだこれだと臆説を構へるのは聊か馬鹿げてゐるやうだ。彼等故人を蘇生せしめ得ない限りは、如何いふ意味で『妙音』と譯したのやらそれは薩張りわからない。吾人は只忠實に本文を修



正し、最も妥當と信ぜられる方法でこれを解讀する。その結果が支那譯に一致するとせざるとは固より關する所でない。一致すれば結構、一致せぬからと云つてそれは何とも仕方がない。無理をして一致させるが如きことは吾人の取らざる態度である。

## 六

併し支那譯家が例外なく『妙音』と譯し、註家亦終始これに同意せる *sarasvati* に就て今少し考へて見よう。此の語は前にも云へる如く『湖水の所有者なる女神』と云ふ程の意であるが、これはシン  
ドフ即ち印度河<sup>インダス</sup>の異名と云ふことは學者の一致する所である。或はこれを現今の *sinsooy* なりと云ふもあれど、この語は元來地名とも河名とも見られ、アーリヤ民族のある一の住處に命名せられたその地名が、民族の移動と共に到る處に持ち運ばれたものらしい。現にイラン民族のゼンド、アヴェスタ經典には *Haraguaiti* と稱する河ありて現今アフガン地方に存在する。アーリヤ民族が印度に南進するや、七河地方を總稱してサラスワティーと云ひ、遂に七河の第一なる印度河を呼ぶに此の名を以てせしものであらう。印度では吠陀讚歌なり、後代の神話に於ても相當大きい役目を演じてゐる所から見ても、又サラスワティー讚歌の中に『偉大なるシンドウ河』と呼んでゐる所から見ても、決してこれ五河にも及ばざる如き小流でないことは明瞭である。アーリヤ民族の中心は現今のラジプタナ地方に移り、これを *Brahmavarta* となすに至つた。即ちハステイナプールの西北地方

である。此處にかの *sutsooty* と云ふ小河が現今では海に達せずして沙漠の中に没してゐる。勿論此の地方はドリシャドヴタイーとサラスヴタイーとの兩河の間に位し。この小河 *sutsooty* は古代のサラスヴタイーであらう。併し恐らくこのドリシャドヴタイーもサラスヴタイーも民族の移動に伴ひ移植された命名であるとするのが至當である。歷山大王遠征の時尙は生存せる五河地方の民族ブル族がその兩岸に住してゐたといふより推しても明かである。さればサラスヴタイーとは本來印度河を指したものと見るべきである。

## 七

此の *sarasvati* は最初は河として崇拜せられ、後に女神として崇拜される。吠陀時代では單に河神として崇拜されるに止まつたものだが、後梵書時代に及び、始めて言語 (*vac*) と同格視せられ、更に進んで雄辯、技藝の女神となる。

リグ吠陀では諸の母の中の母であり、諸の河水中の最上であると歌はれ(二、四一、一六)、富、勢力、不死、子孫、長壽を與ふ(一〇、三〇、一二)。天上より或は廣大なる山より供犠の庭に降臨せよと禱はる(五、四三、一一)。この天界から供犠に臨むといふ一條は後世かの恒河が天上から降下する印度神話の前駆をなすものである。今次にリグ吠陀一〇、七五の讃歌を擧げる。これはサラスヴタイーの讃歌ではない。印度河の讃歌である。併しサラスヴタイーは結局印度河のことゝし得るな

らばこれは其の儘サラスワティーの讃歌としても然るべく、河といふものが印度の原始民族の前に如何に偉大なる天然現象として展開したかを最もよく物語るものである。河水の響といふことを歌つたものでは此の歌の他にはあまり見られない。この歌はかなりの熱情を以て歌ひ出されてゐる。

divi svano yataste bhūmyā upari

anantarp śuśman ud iyarti bhānunā;

abhrād iva prastanayanti viśṭayah

sindhur yad eti viśabho na roruvat.

「響は天界に地上にのたうち回り、

(激流は)閃光を伴ひて無邊の力を勵ます。

吼ゆる牡牛のごとくシンドフ河の進み来るや、

沛然たる雨は雲より射るが如く轟き渡れり。」

恁うした印象を河によつて受けた民族が後代になつて言語、妙辯の神格化をこれに對して施すことは當然の結果でもあり、『妙音』といふやうな造語は既にこの吠陀の歌からだけでも當然選ばれて可なるものである。

恒河は古代印度民族にはあまり親まれてゐない。印度民族は先づ印度河の流域から進んで來た。

恒河の地方へやつて來るには相當の年月を要するのは勿論である。併しリグ吠陀の中に少くとも一回だけはその名が列ねられる。何と云つても印度では印度河と恒河が其の兩大關である。後世の印度神話には恒河に關するかなり種々のものが發生した。かくの如くして西に印度河、東に恒河、これは印度民族の前には恐らく同等にして相下らざる驚異であらねばならぬ。サラスワティー即ち印度河を最大級の言辭もて讃嘆せし彼等が恒河を讃嘆せぬと誰が言ひ得よう。随つてサラスワティーが『妙音』と譯されるやうに恒河に親縁ある語 *saṅgada-svara* が亦『妙音』と譯出せられたとて不思議はない筈である。即ちこの理由で先に出した「恒河の本源」といふ意義から、印度河なるサラスワティーが取つた過程と同じ過程を取つて、『妙音』の譯語が生れるに至つたものと想像し、推定することは中らずと雖も遠からざるものがあると信ずる。

## 八

⑬更に別な方面からの一考察がある。これはやはりこの語を *saṅgada-svara* と見て、これを *saṅs-ara-svara* なる訛語から解釋せんとするものである。先づ訛語 *saṅsara* なる語は「喉」の意なる *saṅs-ara* なる雅言と等價を以て取扱はるべき筈だが、これが偶々 *saṅsada* に轉訛することは可能である即ち *ga* と *da* とは *puggala* と *pudgala* の例から見ても轉訛することを知り得べく、*da* と *ra* とは亦轉訛し得べき音である。即ち次の雅言と訛語との對照に於て知るべきだ。

da だ la となる

budbuda——bubbula

daupda——dohala

次に la だ ra となる

ālabana——ārambana

又 ra だ la となる

ruj——lujjati

pari——pali-

以上の如き雅言と訛語との關係を見れば gaggara が gadgada となることは承認し得る事實である。gaggara は<sup>(14)</sup>ベリ語としては「咆哮すること」といふ意義で、但し gaggari なる女性形のみ用ひられる。この語は haṃsa-gaggari と連續し、Jātaka v, 96 では haṃsa-madhurassara「白鳥の美妙の音聲」といふ説明がある。随つて gaggara から説明すれば gadgada を「美妙の音聲」と譯し得ないことはない。即ち gaggara = gaggara = gadgada といふ風に移して行つた考へ方である。これも確かに可能な一考察ではあるが、併し既に gadgada に「美妙の音聲」、「妙音」の譯があれば、次の svāra なる語は蛇足となる。加之この考に随へば gadgada なる寫本を承認することになつて、差當り現

在の梵文寫本の一致する所に背くこととなる。これらの理由で予は採用する氣になれない。但し尙他にも恐らく何がな適當な解釋考案がまだ生れようかと思ふ。それらに對してこの小篇が幾らか動機ともなれかしと念じつゝ此に筆を擱く。(七・一〇・四)

## 註

① 竺法護譯、正法華では品題の處だけ『妙吼』、本文は『妙音』羅什譯は通じて『妙音』となつてゐる。

② ケルンの英譯四〇一頁、四〇三頁、四〇四頁の脚註參照。ケルンは本文に原語のまゝを擧げてゐるが、脚註には *he who has an interrupted sound* などいふやうに解釋してゐるから、『訥音』の意義を承認してゐると見て差支ない。

③ 岡教遂氏譯、梵文和譯法華經七八五—八〇二頁。氏は「普通に訥音といふ字なるも、佛教梵語にては反對なる義の美妙音聲の意味に使用する慣例あり。正法華には妙吼菩薩とせり」と云つてゐる。慣例とは竺法護と羅什が妙音と譯したことを云ふのか。其の他に此の語をかく譯した箇處が有つたら知りたい。さもなくば慣例とは言ひ難い。尙ほ正法華の『妙吼』は前註にも云つた如く品題のみでやはり『妙音』の譯語を用ひてゐる。

④ 三十頁に互る長論文である。先づ語根の意義より説き起して、印歐語を考證し、重複相に關する疑義に言及して、これを解決するに三案を提供し、要するに『訥音』の義に歸すと結論する。更に過去譯者に關する文獻、西藏の譯語を考へ、漢譯に於ける妙音の文獻、法華經の妙音品の梗概、且つその註釋を調査して、結局『妙音』に歸することと述べ、訥音と妙音の兩義、如何に和會すべきか。此に論者は一轉して印度民族と牛に對する信仰を説き、牛吼の神秘性に及び、牛の同義語を調査し、牛は(牝牡共に)水牛と屢々同一語の下に包含せらるゝを指摘し、更に問題の *śāṅgha* は水牛を意味するが故に、水牛の音は結局牛音と見るべく、牛音はもとより神秘性を附せらるゝ、美妙の音なれば、水牛音も亦妙音ならざるかと結論する。尙ほ支那譯には等しく妙音と譯せらるゝ *sarśvati* も牡牛に關係あるべきを考へて、やはり *śaṅghasvara* と共に牛を背景とするものでないかと推定してゐる。以上は予の見た氏の論文の梗概である。

⑤ 氏の論文に對して予の意見を吐露することが許されるならば、先づ第一に牛と水牛とは本質的に區別さるべきである。辭

典家が同一語の下に種々の異つた事物を包容するも、其の各語は各の或る立場から取り入れられたので、それは各獨立の存在を有する。これを同一視することは危險と謂ふべきだ。随つて牛と水牛とが同一の語で命名せられてゐるからと云つても、これを同一のものと取扱ふべきでない。

大涅槃經第九(大正藏四二頁a)に面白い例がある。譬へば大王の諸群臣に先陀婆來れと告ぐるが如し。先陀婆とは一名にして四寶あり、一には鹽、二には器、三には水、四には馬、是の如きの四法、皆此の名を同じくす。有智の臣、善く此の名を知れり。若し王洗ふ時、先陀婆を索むれば、即便ち水を奉る。若し王食する時、先陀婆を求むれば、即便ち鹽を奉る。若し王食し已りて將に漿を飲まんと欲して先陀婆を索むれば、即便ち器を奉る。若し王遊ばんと欲して先陀婆を索むれば、即便ち馬を奉る。是の如く智臣善く大王の四種の密語を解す。これは *sandhava* といふ語で、意味は「*and*」河地方から出たもの」といふ程のことだが、鹽、器、水、馬の全く異つた事物が一語になつてゐる。

又俱舍論第五、「且らく古の如くんば、九義中に於て、共に一の瞿聲を立て、能詮の定量と爲す。故に頌に言ふ有り。

方、獸、地、光、言、金剛、眼、天、水、

斯の九種義に於て 智者瞿聲を立つ。」

これは *yo* と云ふ一語に九義が有るといふことだが、現在の辭典を案するに、當に九義のみでない。尙ほ此の他に若干の語が包容されてゐる。就中「太陽」といふ意義がある一方に又「月」といふ意義もある。さればと云つて本質的に異ふ太陽と月とを同一視する愚をなすものはあるまい。牛と水牛に就ても亦同様である。

第二に牛と水牛とは印度の人のこれに對する考へ方が異なる。牛は牝牡とも尊崇せられるが、水牛は然らず。水牛は阿修羅の化身のやうに云はれてゐるやうだ。この場合寧ろ崇拜せらるゝよりも、嫌惡せられ、討伐の對象となつてゐる。

第三に *gadgada-svara* を水牛の意義に見るのは一辭典家の説のみで、未だ用例を見ない。一體、辭典にはこの種の語をLの記號によつて區別してゐる。本田氏の提出せられる語の中に他にも若干この種の語あるやに見受けるが、これは相當の條件を附して採用すべきであると思ふ。大體先づ採用を控へるのが安全である。廣汎性が無いからである。随つて氏の

立論の資料に再吟味を要すべきものが若干生じて来る。

第四に、たとひ *adhera* が水牛であるとしても根本に於て水牛と牛とが同一視されることが許されないから、水牛音即ち妙音といふ斷定は成立し難いかと思ふ。

⑥ 南條ケルン出版本四二三頁脚註八。

⑦ 大正十五年十二月佛教宣揚會發行、河口慧海氏將來の具葉梵本の寫眞。この梵本は異つた讀み方も相當にあり、何分千二百年以前の一本であるからに、非常に裨益啓發せられる所がある。

⑧ 予はこの藏語修正意見を寺本教授に披瀝したところ、それは可能であるといふ承認を得た。此に附言して同教授に謝意を表明する。

⑨ 西藏譯でも原語を存して譯しないことは決して稀でない。例へば、橋陳如、吠琉璃等のやうな語、それから全然西藏語に同化したやうな語、波頭摩、唵伽の如き、蓋しその一例である。

⑩ 『辯才天』を現に『辨財天』に作るものは何等正しい典據なき土俗的名稱である。字面が愈深連中の氣に入らぬので、何時となく變更されたのだらうと思ふ。

⑪ 此の下高楠博士印度古聖歌一四五頁以下に負ふ。

⑫ リカ吠陀七、九五、一。

⑬ これは荻原雲來博士の一考である。梵和辭典編纂用務のため、本年の夏を信州上諏訪の湖畔に博士の御一族と過した際、話頭偶この事に及んで種々先生から御意見も伺つた。予のこの小編も先生の意見に基づくもの多きことを明記して此に深き敬意を表す。但し予の結論は恐らく先生の賛成を得る能はざるやに思はるゝも、これ亦止むを得ぬ次第である。今後の研鑽を期して一先づこの稿を終る。

⑭ リステヴィッツ及びステード編バーリ辭典、其の語の下。